「寿越冬闘争」

# 年末年始 孤立防げ

## 炊き出しや相談窓口

回で48回目。コロナ禍での年越しは2度目となり、生活の苦しさを訴える声はより深刻化しているという。

感染拡大を懸念し、年越しそばや餅つきなどの恒例行事は今年も中止となったが、支援者は「温かくて、栄養があり、おいしいものを」を合言葉に、昼食の炊

# 簡宿街へ 恩返しの施術

## 横浜の鍼灸院、高齢者訪問

簡易宿泊所（簡宿）が立ち並ぶ横浜市中区の寿町地区とその周辺で、経済的に困窮する高齢者の訪問施術に力を入れる鍼灸・マッサージ院がある。生まれ育った地元に恩返ししようと、院長が率先して10年間にわたり継続してきた。新型コロナウイルス禍で貧困と孤立が深刻化する昨今は、簡宿街を訪ね歩き、施術を受けられずに取り残されている人たちを探す活動にも力を注いでいる。（加地 紗弥香）

❷寿町の簡易宿泊所で訪問施術を行う長澤亮さん＝横浜市中区❸寿町地区を巡って苦しむ人を探すアマーレ治療院の秋谷貞男院長

寿町に程近い同市南区万世町にあるアマーレ治療院の施術者長澤亮さん（57）が、寿公園近くの簡宿を訪れたのは寒風が吹き付ける12月6日朝。男性（63）が3畳一間の部屋でベッドに腰掛けて待っていた。

「おとといは2、3歩けたが、今日は駄目だ。膝が痛む」と男性。長澤さんは「昨日は寒かったからね」と声を掛けながら男性の脚をほぐしていく。

男性は過去に脳出血で倒れ、体にまひがある。訪問施術を受け始めた7月には肩が上がらず、腰をかがめることもできなかったが、「今はずいぶん良くなったよ」。30分ほどの施術を終えて男性は腕を伸ばしてみせ、表情を和らげた。

同治療院では現在、6人の施術者がおよそ100人に訪問施術を行っている。取り組みの先頭に立つのが秋谷貞男院長（57）だ。

寿町の簡宿街は高度経済成長期に全国から日雇い労働者が集まって形成された。秋谷院長の生家の乾物屋は寿町から程近く、幼少期には、労働者たちが道路の真ん中でたき火に当たって暖を取る姿をよく目にしたという。

だが、時代の変遷で日雇いの仕事は激減、簡宿で生活する人たちの高齢化が進んだ。行き場を失った生活困窮者の転入も増え、かつての労働者の街はその様相を変えている。顕在化した福祉面の課題を目の当たりにした秋谷院長は「地元への恩返しのつもり」で簡宿などに出向いての施術に取り組むようになった。

## コロナ禍、貧困に拍車

コロナ禍以降は、貧困に拍車が掛かり、寿町で暮らす人たちの生活保護受給が増加。介護施設の利用料が払えなくなったり、子どもの扶養から外れたりして、アパートで独り暮らしをする高齢者が寿町周辺に数多くいることも知った。

「デイサービスやリハビリ施設を利用できず、必要な治療を受けられないままでいると、体調が悪化して入院に至ることもある」と秋谷院長。自身は施術の資格を持たないが、声を上げられずに苦しむ重症者を探すため、スタッフらと寿公園での炊き出しや生活保護受給者が暮らす借り上げ住宅などに積極的に足を運ぶ。

ただ、対象者に出会ってもケースワーカーの理解を得られず、全員を施術につなげられたわけではない。寿町の成り立ちを念頭に、秋谷院長は「貧困は個人の問題ではなく、社会の構造的な問題。本来は受けてしかるべき治療を受けることができていない」と話す。

寿町の現実と向き合い続けて10年。「ようやく本質的なことが、少しずつできるようになってきた」と語る秋谷院長は力を込める。「取り組みを一層周知して一人でも多くの人の健康につなげたい」